

「長崎原爆の記録が全世界に伝わるまでの長い道のり」 瓜生田和孝

【祖父・泰山弘道】

- 1888 年 愛媛県喜多郡上灘村（現上灘町）生（氏名：藤井宜）
- 1890 年 両親がコレラにより死亡
- 1893 年 愛媛県大川村（現大洲市）の定林寺住職の養子となる（泰山弘道と改名）
その後、長崎県立長崎中学校（長崎市の皓台寺に寄宿）を経て熊本市の第五高等学校に入学するも、養父の病気により帰郷し、代用教員になる
- 1913 年 長崎医学専門学校（現長崎大学医学部）入学
- 1917 年 同校卒業、医師免許取得、海軍軍医少尉任官
- 1928 年 医学博士（長崎医科大学）（フィリピン大学医学部における熱帯病、感染症学の研究論文）
- 1942 年 東京海仁会病院（現国立東京医療センター）院長、海軍軍医少将
- 1944 年 大村海軍病院（現国立長崎医療センター）院長
- 1945 年 8 月 9 日 長崎市に原子爆弾投下、大村海軍病院に 758 名の患者を収容
- 1945 年 愛媛県大洲町（現大洲市）で「内科・小児科泰山医院」を開業
- 1949 年 東京都目黒区で「内科・小児科泰山医院」を開業
- 1958 年 死去（70 歳）

1. 長崎原爆投下後の状況調査

- ・ 1945 年 9 月――米国海兵隊士官アルフレッド・E・ジャコブソンが大村海軍病院に来て調査。長崎進駐米軍の原子研究班（部長：ワーレン大佐）の米軍医官一行（班長：バーネット大尉）が大村海軍病院に来て調査。その際、ヴァーナー中佐が治療用にペニシリン 3,000 瓶を持参。大村海軍病院が入院患者に使用（日本国内での使用は初めて）。
- ・ 1945 年 10 月～1946 年 4 月 15 日――米軍第 2 海兵団（長崎）のホーン軍政官が長崎医科大学復興に尽力。ホーン軍政官は原爆投下後の惨状を見て、その悲惨な実態を米国民こそ知るべきであるという信念を持ち、米国に帰国後も同じ考えを持つ泰山と文通し、泰山が 1955 年に英文で執筆した“Memory of the atomic bomb of Nagasaki”の出版を米国の出版社に働きかけてくれたが、米ソ冷戦の時期に米国政府が許すはずもなく、泰山の死（1958 年 12 月）とともに立ち消えになってしまった。

2. 泰山による『長崎原爆の思い出』執筆開始（1951 年 4 月 21 日）

- ・ 永井隆博士との交流――永井博士と泰山は長崎医大の同窓ということもあり、また、世界平和を切に願う気持ちとそのためにはまず原爆の惨状を米国の女性に知ってもら

わねばならないという考えを一にすることから、永井博士の入院後文通を続けていたが、博士の随筆『長崎の鐘』（1946年8月執筆、1949年1月『マニラの悲劇』と合本の形でようやく出版）を基にした松竹映画「長崎の鐘」が1950年秋に上映された。それを鑑賞した泰山が送った感想文に対し、博士から「私はもう何もできない。先輩の一生の方がもっと舞台も広く日本医学史の一面を物語るものとする。どうかご自伝をお書きください。」旨の返書が来た。開業医でなかなか時間が取れなかった泰山であったが、朝鮮戦争のさ中の1951年4月21日、「平和よ来れ、平和よ来れ」の書き出しで執筆を開始した。

- ・その2週間後、1951年5月1日に永井隆博士は死去した。
- ・泰山は、『長崎原爆の思い出』の最終章「原爆よ再び地上に落つるなかれ」を仏教での七回忌に当たる1951年8月9日に脱稿した。

3. 同書英文版「Memory of the atomic bomb of Nagasaki」の執筆

- ・泰山が同書を執筆した真の目的は米国の女性たちに読んでもらうことであつたので、日本語による執筆完了後、同内容を英文で執筆し、“Memory of the atomic bomb of Nagasaki”を1955年に脱稿した。英文の校正は、瓜生田の小学校時代の恩師で当時小学校長をしていた庄司武夫氏の息女で英書の翻訳を行っていた高橋女史に依頼した。

4. 「週刊朝日」（1970年原爆25周年特集号（8月14日号））による遺稿の紹介

- ・永井萌二記者――泰山の長女・俊子（瓜生田の母）と小学校の同級生であつた朝日新聞永井記者が『長崎原爆の思い出』の存在を知り、文章の一部を泰山の部下が大村海軍病院（当時）で撮影した写真乾板の印画数枚と共に「週刊朝日」で紹介した。
- ・国立大村病院（現国立長崎医療センター）は「週刊朝日」の記事を読んで、元原稿と写真乾板を借用し、元文章と写真の一部を国立移管25周年記念文集に掲載した。
- ・そのほか、旧大村海軍病院に勤務していた職員が結成した「大村海軍病院会」の松尾会長や彌永氏らが原稿と写真乾板を預かって出版しようと努力したが、応じる出版社は無かつた。

5. 『長崎原爆の記録』（あゆみ出版）の出版（1984年10月5日）

- ・井上謙蔵東京理科大学教授（当時。元東京工業大学教授）の尽力

井上氏は長崎原爆投下時、九州帝国大学（現九州大学）理学部物理学科原子核研究室大学院特別研究生で、原爆投下直後の11日～12日、長崎に篠原健一教授、森田右助手と共に調査に赴いた。約1か月後には同大学医学部の医師たちも加わり調査が行われた。終了後、井上氏は放射線の影響で日に4～50回の下痢など体調を崩し、九死に一生を得た。

大村海軍病院会に預けてあつた原稿と写真乾板が瓜生田の下に戻されたのは1982年であつた。瓜生田は1967年に目黒区から世田谷区に引っ越しており、道を隔てた真向かいに井上氏夫人の両親の家があり親交があつた。両親から「娘婿が大学教

授をしているので出版社も知っているかもしれない」として井上氏を紹介された。井上氏はいろいろと出版社を当たったが、内容は純理数系のものでないので、出版に応じる社は無かった。それから2年経ち、井上氏が学友の小島昌夫氏（当時都立両国高校教諭）に相談したところ、あゆみ出版を紹介してくれ、編集長の等々力勝氏が原稿と写真乾板を見て2週間後に出版を快諾した。しかし、定価とページ数の関係などから、遺稿400字詰原稿用紙430枚のうち125枚がカットされた。編集長によると、カットした部分は、個人的感懐に過ぎるところと冗長と思われるところ（大部分が元原稿の第8章）であるとのこと。また、タイトルは同じ理由で『長崎原爆の記録』に変更された。

- ・本書は各方面の評判を呼び版を重ねたが、現在はあゆみ出版の解散により絶版となっている。

6. 山下俊一教授の編集による英文版「Collection of Memoirs of the Atomic Bombardment of Nagasaki 1945-55」の発行（2005年8月。発行：長崎・ヒバクシャ医療国際協力会（NASHIM）＝長崎県、長崎市、長崎大学等で構成＝）

- ・山下俊一長崎大学大学院原爆後障害医療研究施設教授（当時）が『長崎原爆の記録』の手書き原稿の原本を大学に寄贈してもらおうとして、同書で「解題 長崎原爆と泰山弘道遺稿」を執筆した井上謙蔵先生に連絡を取り、すでに文京区に転居していた瓜生田と3人で面談した。その際、泰山が英文版も執筆し、原爆の悲惨な実態を隠ぺいすることに躍起になってきた米国のみならず全世界に知らせることを目指していたことを知った山下教授は、泰山の英文版脱稿後50年の間に判明したこと、永井隆博士のこと、ダライ・ラマの巻頭文、井上先生が自ら英文で書かれた解題等を加えて編集し、NASHIMが英文原稿を校正して発行した。
- ・国内の各大学医学部、国連本部、世界保健機関（WHO）等に無償で配付（1,000部）。これにより、長崎原爆の記録を世界に知らせるといふ泰山の悲願が達成されたわけである。ただ、学者や研究者には知られることになったが、世界の一般人、特に米国人女性にも知られたかという点においては、残念ながら未だしである。

7. 『完全版 長崎原爆の記録』（東京図書出版会）の出版（2007年8月29日）

- ・瓜生田の父和清は海軍兵学校第62期出身で1943年11月のブーゲンビル島沖海戦で戦死したが、妻初実の父井口正治も同じく海兵出身で第74期であった。2006年の同期会で井口は柿木克己氏（当時日本インシュレーション社長）と会った際、『長崎原爆の記録』のことを話した。1945年8月6日、広島市から25km南西の大竹町（現在市）の海軍潜水学校学生舎内で身をもってピカドンを経験しその後の広島市の惨状を目撃した経験を持つ柿木氏は、瓜生田から同書の元原稿には同書出版の際カットされた部分があることを聞き、元原稿が寄贈されていた長崎大学大学院医歯薬学総合研究科附属原爆後障害医療研究施設の難波裕幸助教授および同施設資料収集保

存部資料調査室の三根眞理子助教授から元原稿を借用し、精読した。その結果、カットされた部分には、占領軍（実質米軍）内部の混乱、日本海軍の組織上の弱点と人的側面による混乱が個人単位での行動・会話を通して記録されており、歴史上の貴重な史料であり、それらの全部（元原稿の「序」、「第 8 章 アメリカ原子研究班の進駐と長崎医科大学の復興問題」、「第 9 章 日本国民の反省」、「第 10 章 原爆よ再び地上に落つるなかれ」）を収載した本を出版することの意義は大きいと判断した。

- ・柿木氏は『完全版 長崎原爆の記録』の出版意義を説いて多くの発行所に当たったものの売れるかどうかの判断から断られ続けたが、東京図書出版会が検討の未発行してくれることになり、発売はリフレ出版が行った。（そういう状況のため、日本インシュレーション株式会社（当時は非上場）の自費出版の形となり、文章の校正は同社の情報管理部員が行ったため、誤字脱字があることはご容赦いただきたい。）

8. その他の人々

- ・山本哲氏（非営利一般社団法人「新しい市民・市民社会・市民文化研究所」会長、元ヨーロッパ大学院（在フィレンツェ）教授）——入江昭氏（米国在住の国際政治学者、元米国歴史学会会長）に“Collection of Memoirs of the Atomic Bombardment of Nagasaki 1945-55”を 2009 年に手交し、彼の著書の中で紹介することを依頼したが、実現していない。
- ・鳥居吉治氏（長崎源之助追悼展（於長崎医療センター）実行委員会事務局長、J:COM 勤務）——『汽笛』、『ひろしまのエノキ』の作者で児童文学者の長崎源之助の追悼展を彼が戦後すぐ入院していた大村海軍病院（現長崎医療センター）で 2011 年に行った。広島、長崎を始め日本全国の小学校に広島原爆投下中心地の小学校で生き残ったエノキの 2 世、3 世を植樹する運動を続けている。原爆を投下したトルーマン米国大統領の孫クリフトン・トルーマン・ダニエル氏に NASHIM 発行の本を手交した。
2011 年 10 月 2 日～11 月 7 日—「長崎源之助追悼展」（於長崎医療センター）
2015 年 8 月 8 日—「ひろしまのエノキ記念植樹式」（於長崎医療センター）